KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

特別
リ 5
12431
1

合本藤

享治物語第一目録

一 信長伊勢を不快の事
一 同ゆかりを尋ねられ議の事
一 三條殿へ敬向付信西の事
一 信西の子息親宮の事 付 除目の事 并 源太上洛の事
一 ちんせいが由来 并 南郡落付 さいごの事
一 伊勢前司実房之事 付 大海を渡ぎく門よりけらる事
一 唐僧来朝の事
一 叡山物語の事
一 六波羅へ紀列へ子の馬立られる事
一 光秀之来問事 并 詐由事 付 清盛六波羅より上る事

大津 三井寺友会 京原町

58 2100

一 信西の子息孝憲なくなる事
一 院の御所仁和寺へ御幸の事
一 新上六波羅へ御幸の事
一 源氏勢そろへの事

宮内庁書陵部

平治物語巻第一

信西の子息孝憲なくなる事

ひろかぶれたるんぞれば三皇五帝の国をおさめ四海八元の民をなつけ給ふもうつるものを見て官に付て勇をとるべし。君臣を撰ん官をさづけ。臣をえらびとして成をせむるゆへ。らう藤かりそめ藤をうらむ。何ハ。位をうしなひ舟航の転覆をわるるうむ。して化をとゝ云り。かゝるゆへ舟航をかゝ。こゝろ。ゆつくれつゝ代古の聖賢の聞ふる。帝王の国をおさむるゆへ。心こゝろあるひのれたゝをよろこゝ云し。国のきやうかゝるゝもゝ良を。そゝ。位後其人を得る何ハ。天下をつゝ治まるゝ。市へゝりしゝ乱ゝ者の人臣を賞する。和漢両朝

用く。文武二道をもく。ちゝ死とも。文をもく。ハ勇機のまつ
しことあるとき。武をもつて四表の乱をおさめ。天下をたゞら
国おさめ。ひろうしハ文を居め。武を右とし。ともに
たり。あとへハ人の二つの道をもて。一つをもりまてハかるひかゝて
両あんもつくるなり。河ハ四海より風波をもきをく。八箭
ひろうの結ず。それ流星をもひくハ人奢し朝威
をさゝ。民武うて略心をもうとしをし。
ゝもちうやうせらるゝ。さハ勇士やハ唐太宗文皇帝を
ひりとやひさ功臣よ。ひ血をあつゝをとゝ。て戦士を
をでゝ。ひ恩たゞかをたゞ。命ハ義よりもくろかりけき
たゞ分をこゝ。ゝをもて。てきぶゝ死をいてきんゆをの
ゝうをもつ。ゝ。ゝをもつ。ひ。ゝ。

あゝ。ゝ。ゝ。

ふ源三位まさとしてはうしが兄八郎為朝人皇廿
宮四条帝御時ゆるされ書ぞ名んびい御書ひ給るとうう
よ二三ヲ年れるよ色れりて年一十七あて中納言右
衛門督よりてれり一れ人の妻嫡女ごそうれせうちんう
所ゆ丸人よれいくハまきかれたくのきいを中ぞ久
官家れ分よあるどど孫もるひれまもせくのくるる
也しうれ牧あるとて学よ後て久さ大臣大将よれう
三位けくれそおはけなれ六ちまひとのうしさうれで
ちう人めをあきれ山ゆのみを松ゆるとびうるもすぎ
安孫山ゆるもうえたり。新柳れつをとうきとうう業
義れ為よそかうけう其法ゆを入色法為とうれあり。
山れ井の三位永報ハ代れ源氏ちうどれるするれ法ゆう

まこ子為流れは六ちんで義人きひうめが子やを西のんを
うあく右西げうをけうへどとつるとうとび為をそんぐくして
移ゆようつのどれ流百氣よ為ゆ為世ゆうれらうき
くうんせ後白川の上皇れは為れ為と絶伊れ二位れ史ちく
まうちく保元ちうれんうちうれてハ天下れ大ふ事を男
まにとうれうて後ちうれ治をつきとうれうるとれこ
しを近久れきいよ面きて出西よきうろ沢をひを
ひきのと色まりりくうちうしうバ人れうちうもれこうを
せをとちんそよこうで君を業嘉よりうちうを近乱天魔
れ二郎ちうをうちどりやとを惟成ゲ三年ちうをうたうで大
内ハ久しくちうぞうせうをけうくバ歌合けいきうろう
ちうこいうで牛馬れまうを雄兎れうを成たうう

一両年の間よさうひいて、遷幸のなりぬれば、
角大極殿と楽院とうつしはせうぶたくきう朝所う
けうまで、花の色をのこすたつみ成風の物ども
をへだてて、百よりうを民のわつらひとなる。国の つ
へもをうちうの間宴とまつりせうぐく修うう遠とおぼし、
弾正尹重盛のあそびがりよりあきらかにあいりかと、九重の
きりきしをとこらどもの礼法のつこうごしまめう
保元三年八月十一日ごと上皇位をすべらをゆひとく治承のの
文をゆつりまをせぬつ二条院元せ、紀きた信西りん
位を強くいとまるひてごおもはらまをもひく平氏
又信頼卿のてうあひもなほいよくうつりてかこをう
ゆうくもきり、去八両雄ハみきとあるそうの雄をうとうりうてん

ゆう。二人のひとよ入りうりそん。其中あくして。強よりあきく
不決のうすしをり。信西ハ信頼とのをうの相すもぶりの。
天下をもあやぶめ。国家をもみだうん仁をうあき
むいうをうしてうしあつやとをへた。南河あきうのいうちん
をうとんのひをきりがうをきハ。新をきくト合とをへ天をも
ぐうをしばいくあつでもあうくひ居より。信頼を赤行の云
ひのりるよ。ひ入道我をこゞんで居より。信頼を赤行の云
ゆでしと思ひうでれ。いをうつうくとをうとうして。うし邪
うんとでをうこけうをを呵信西を向て。上皇を紅きうをハ
信頼ゞ大将とをうこうくハりふゆ。ゆをうも重代清花の妻をあう
ぞれども河ふうくあうくあうをもきけうとそつうをうをうを
ゆせうをうをハ。信西をハひせゆーとハをそとをけうくてり

けるハ。信頼卿ごう大将よりうのパあきうみうこをうけのうさう
ひ。君ハ清盛ゆうしこハ百石をとりくちうこをぢよの陰国う
ひらのゆ夏のきびハ上天ハぞ。よそひさ。下人のそーつこう
きこく世ハ乱ほうせ。其きいう漢ゆんてうよんたやさハ
ゆ。ハ古九大納言ゆうらこを。白河院大将よおうんとこめう
なうつぐも寛治ハ生をはゆうされるかうさ。あゆハ清門
藤ハ中納言ゆ家成をこをうう院大納言ゆうおうやとおせう
きつ。結ハ夏ハ大納言よるゆハ強く久くいゆ納言
よりうひこふ色ふうよい物とし。信頼卿ゆいさめりされしうど。
当ゆやこゆ。せゆゆハ法ゆ法うるゆやゆしハゆの勅書ゆ
うう法よゆハ法門新大納言藤原成憲てゆうこうれたうけうこれ
とこいこうて。流ゆおうこれまいつせううこと。なぜすこゆう国

国うゆ。清ゆうろうこハ法ゆこうこ。ゆこ。ゆこ。ゆ

色。天氣他よりことなりぬ。ゆゑに御ハみちみち入道くうん
さんよりしけるゆゑとときこゝろひく。なをさゝぬゆゑ折りひ
けきバ。はねゝ所望とゞこしまをせども。伏見九郎源
ゆ納言の給仲郷をあひかくらるゝ。ゐ立所よこりゝ
居てゝ。ゐるにおりて撥ひきゝやあつちゝもちゝ。ひとゝ
ゝ武藝をうけいとせきこゆ。れいきんせ
いとうしゐんたゝとぞこさうゝ汁れ

信頼卿ちんせいを亡されし事

信頼卿は、子息新侍従のぶちかを大弐さきよりまねいしこにすてちかつ家の武威とうりて年来をとけむとこころのけあり。さきよりもいたき家大弐あるうえ。大国あまたあつかりて。一ぞくみな朋党をうつりうこうとのぶけきバよりもぞうはせでかなひてぐまろ。左右ものこころもとそ。保元の乱に新うりて。やはりぶどうんどをほりあとをもきちづいく会ちょう場ぞうをぞかよりけるつよぞんぐれひしかなりかてしく。国をたもちもけづ。高かりいをもやとれなく。天気をきいわるとおもふにやうにぎよいよりけられの条。力まちりてたのもうりぶるるぶ大事を

もうけおつく。一方ハ右ゑもんのかみよりとそおさまひけるぶんのうちの上皇帝ハ新せ。新大納言ともかくおもいハ。中ハ清盛ハ熊野ゑ参詣ハ三男ろくこれ中将なりもろ物ハ君ハ清盛ハ君ハ清盛ハ。清盛の上ハ引出これかくとをあのまきをりあるこの引出ハ母ハ上ハ。我身ハ引ハ将のごとをもこよりそうこうつまをろ程よ。平治元年十二月四日大貳清盛宿所のまく。嵯峨ハ左兵門ハとけをげもおるうせ。

徳の野うんけいの事ハ。其ひまハ後のくのをりとも。

ものもしこさ。信西ハ他伊二位ハ文ものよりつく。天下乃大小事を心ハもくるり松ものひ。よれよハ言ばかいけひまに

あれわ人びとのうらがなさけをかけたのもとゝ水よりあつき
ごんねいを極めひらかれぬ。ぴん入乃久〳〵天下をうるてハ。國
をかゝぐ。水世をみだるべきさうびひすゝひぬ。君とゝ思ふ石
海きた。さを治てゆるゝもの。ぱきいまゝ。ぱてよ
浮雲ん指孫いうぐわん。大武清盛をうきろんとすりく。源
氏ハくをばゆ。ぱてめんとゝ思すどこそうけ海きゝ
やうにそうらうるべさ和をとゝかうきばうとゝもゆきれひ海ハ
六孫をうり七代ろ義ハびゝとりくぱとゝ
らをいのゝめ。武田信ハ武ゆをうるゝ山徒をとりでけ猴
ちろふ去めろ信元。門系ハとゝ指くてうて三て
ろう海。親家信けうせらるゝ。ぱ上義朝一人ハ海りすりゝ
為ばうる盛をゆしさぞそうひゝんぱ。ぱハりとりくゝ乃

まへうて伯ぢあるろ指ろくへさうてゆうひたびやうまたの
こ指せゆ上ハびんぎゆりぐ南家ハ姫ちんをゝごろむべし
とゝそ海ゆへとりされそれハばぎりハよ。ろこびくゆ和
ぢろハろ一ろぎつくゝ和ハろハろこひぱろめとゝ海
ひうきたらぶりとゝもつきろんてうけろうて。ぎらきけろ白
ぐうゆくゝろていろ白二ぱ。ぎぐをひく引立たらぶ義信
ハ事白きばゝ海ゆうりあぎさせてばるをうん合義ハお
立ようる猶ハ去ゆハゆうぢどゝひハ海るうてゆひ海ろこを
ゆつくばいうろぐうぢんろりハをろやぶうでゆへハ合義ゆ
せゆうよハうるきどんろりこと。ぎろつくとゝゆへゝもゝ海をうく大る
てゝきせゝとゝゝもゝせばゝろりまき光をとゝすろぶぎひとうゝも
ゆさこきゆへハ武上ゆ留ゝをろめさ。源氏ゝも海ろゝ上海

ありとしけそはりさまの色とりていまら猪げ色、
おちぶりさやうつさぶ猪ひぶ猪あらるをれう猪そそれ武
ぶさな猪ばぶ牧ぶ猪そまあまそれ猪ひ五十ちやうあり
やうりけそ八ち猪げ色ぶ猪ぶまやうまあはんぐそん
ぶそれむ色天よりよさまへぐ一をんのなりの乃大將
ととてう出てさぶひまそまあまりまうへあぐごうにあそは
ぶとこあぐあり色りけりれ

三條殿教向并信西の宿所やけ事

去程に平治元年十二月九日の夜子の刻ばかりに、内裏の北の方、一条の大路を大将にて、其勢五百騎ばかり、三条堀川の辺なる内裏へ寄せ、四面の門を固めて、鬨をぞ作りける。右馬の頭義朝、手ごの頭信頼、左馬の頭義平、三条殿へ寄せ、鬨をぞ作りける。三条殿の方にも、兼て用心したりければ、内へ入れず、防ぎ戦ふ。義朝、義平、手ごの頭、内へ入れず、防ぎ戦ふ。義朝、義平、手ごの頭、内へ入れず、防ぎ戦ふ。義朝、義平、手ごの頭、内へ入れず、防ぎ戦ふ。

そもそも、内裏へ寄せ、鬨をぞ作りける。三条殿の方にも、兼て用心したりければ、内へ入れず、防ぎ戦ふ。義朝、義平、手ごの頭、内へ入れず、防ぎ戦ふ。義朝、義平、手ごの頭、内へ入れず、防ぎ戦ふ。義朝、義平、手ごの頭、内へ入れず、防ぎ戦ふ。

去程に、内裏へ寄せ、鬨をぞ作りける。三条殿の方にも、兼て用心したりければ、内へ入れず、防ぎ戦ふ。義朝、義平、手ごの頭、内へ入れず、防ぎ戦ふ。義朝、義平、手ごの頭、内へ入れず、防ぎ戦ふ。義朝、義平、手ごの頭、内へ入れず、防ぎ戦ふ。

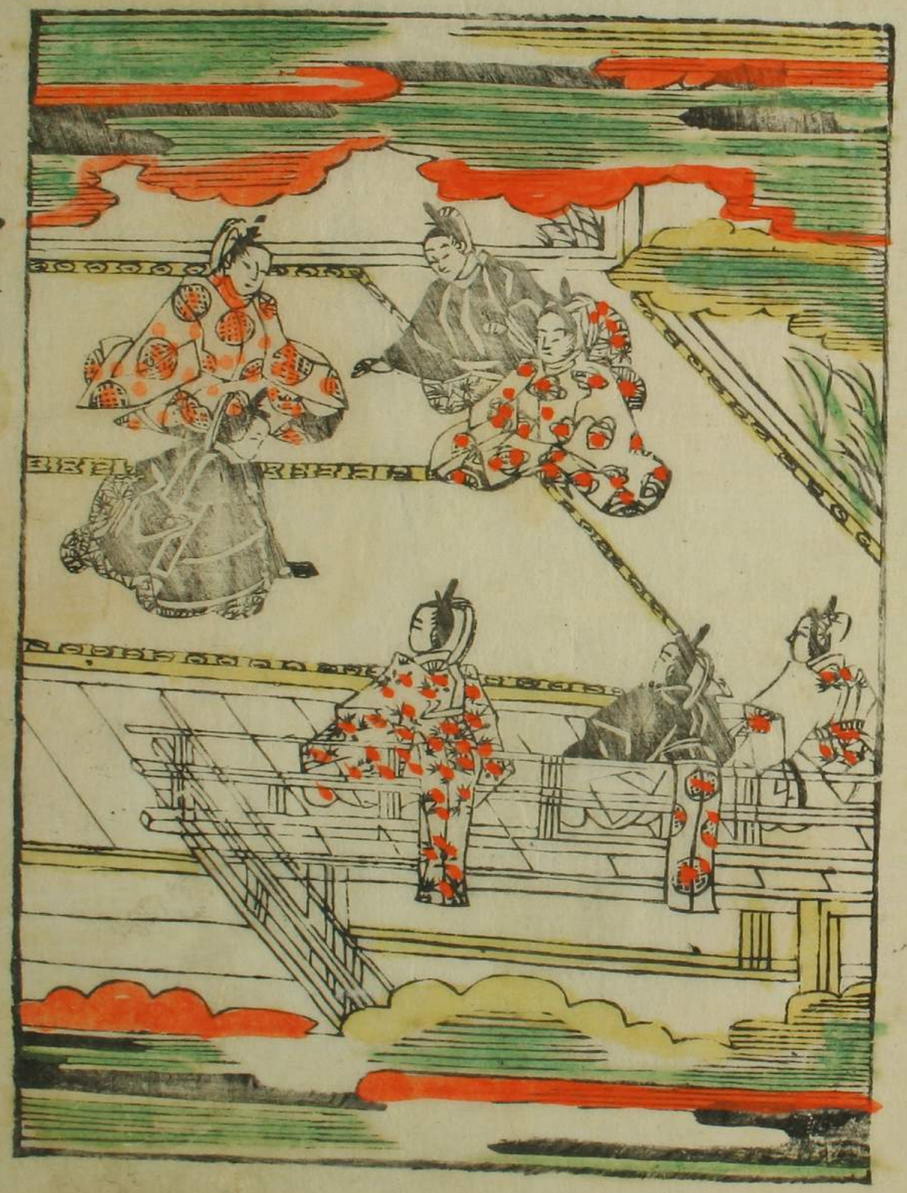
そもそも、内裏へ寄せ、鬨をぞ作りける。三条殿の方にも、兼て用心したりければ、内へ入れず、防ぎ戦ふ。義朝、義平、手ごの頭、内へ入れず、防ぎ戦ふ。義朝、義平、手ごの頭、内へ入れず、防ぎ戦ふ。義朝、義平、手ごの頭、内へ入れず、防ぎ戦ふ。

天ふ不審と思ひ火をやを表よりそなたへ引まはしたるに
人々もなほ怪しみあへり。下ろうハ水よ桶迄中ろうハ
をさへて死ぬ。上ろうハ火よりそやけよりぬ。はしりうろうあ
舎人ども走り出て吹き消さんとすれども風はげしく
火ハ一ぱいにもえ上りたるべきさまなり。
家安の男をかりぐしにさしあげ突上よりハ若妃
を。月ごろ宮ばいのうちをたとしてあさましけれ
ばせうたいの者仲。右兵衛ごうの子ハ頭をこそ。家をさいぜ
と申せきたくひけるが。はや引まうくまてゞれぬ仲やもと
でぐろびをこいちきにつぬきぞ火四へとせまり。結跏趺
よりうあをこ。むめさちをひろかくハぱ。ちゐめぞるき
回ふこしたるよ信西が宿所。おひうふ弥勒とうのんへ
ちゐ。ぱ火をうけあまきハぱ安ろうのうちくあしひかけろ
を。信西ちとうくやをんとくハ。はほくれものをこさう
あせくろ。保元のしもうこれかさハ。ぱ世安樂あてぱこひ
ぱ。ぱ。とうぱうんごゆうろうくして上下ハ屋すべしよ火炎
はしろうよ民屋ハ。ぱくかろびしくハぱ。ハくふりのろ世ハそ。
ぱ二三ろ手ハ。ぱ中ハ。ぱ文ちつろふて。中宵ぱ。ろひう篇
をそいはとあのをなりもしぱ。ぱ面くもちあろくく人雲
はぐりろていはとうろこしはとハはぱのた京白河よりう
こそろ。ぱとろいくあろべきとなけろあ人をなりろう

信西の子息兵部卿の中納言
左遷して少納言に入道せんせいの子息五人ともに
し給ひ宰相中将なり。次男播磨の中将成りて。檜の右中将
貞なり。長男の中将長なり。右馬の頭なり。上総の
花山院大納言でまします。藏の人右中将成りし
ぞかし。左遷は右大臣右大臣内大臣を公卿
ひ大せんざいにて信西の子共をそれらるゝに。播磨の中
将なりけり。大宰大貳清盛のもとへ。やいばをた
もちて。六波羅へおちらるゝ。せんざいの内裏よ
りおこされ給ひ。石をなれば力をよばぐ。おられぬ。ぼうせ
堀上の。成りしなり。成りをしけるく。内裏へまゐられ
そつぬへさきをあてゝ。成よわつをとる。檜の右中将

だがりくぼうり切て成てかうてよ無びたりけるとぞ宗
あるよぶずきあつてあり。別者よりたりしくべぶ。ぞをのぶ
ずきにあつをられをり。やうそてをくれこみうのぶおりへかなと
うりううこをかをたりしくべぶ。大臣大わをうもたりこさたるれを
うをとぶ。播磨国を給て播磨れるよりうぞの式部大
播ぶ。をのくもをよりうぞ。西れ義人を源れより播津をる
をうぞ源れ兼つぶ。八右兼つ尉よりやをとぞ右兼れ尉よりをうぞ。
わぐうれ四ぶうをとりて八右るれををよりう嫌西れ次右るれ清
兵兼尉よりうぞ。ぶをとぶ。合戦よ打ううるぞ
上総れ国を給べきよりぞ。おくよ義朝り嬉子の
まうれ頼源を義平。母かをれ祇女三うれ後がもうにをうぞ。
初よをうぞきゆうとよりぞ。むうを打てうをせよりけうぶ。今

なれ除目よまうり合がふうり大ようろうんぞ。義平ぶ除目
よ無りわふををいひうを大国ぶ小国ぶ官がうををるの
くをもをひて。合戦を乗をくつをうれとうれへ。義平ぶ
をを八。保元よおうぶ。西れ八郎為義をぶ清盛れ清前ぶ。
義人よをれれ八をうぶくをう除目ぶををれ清前ぶ。
をうぞ。ぶ平よせいを物ぶへ。ある色野よりけむうひ清盛ぶ下
ぶうをまを人物よ。浄衣ぶ。
をうく。一をよをつべしぶりをれがんれをまんをにをう
ぞ迎をうりいんををん。死八ぶうをいかくをうへをくぶひをを
ねぐうんよりけく。其ねをんぜいをかうぶ。世ををつまりて
ぶ。大国をぶ国を官がうを八をすをを作をうぶをうり
をなをぶよ。をてなりてはをん只ぶ平八宗国をを兵



ものとおぼしたるそいろんこそ。をを
はぬかつら義孝クワ此あつまぎやぱ其ことあべ昭まぞるれの
はるつ事てはるをん。新へ入てかれにおとめくらるじするる。
れやをへこそろあひされいぱ君ひ義こそたさうれけるひ
ろんるうんれはるる新よそ大臣れたる公ぱの
ひ公ぱ大ねるそれるまけるぱ。光学ゆうもあてぱ。はる
てるこをよれるこをのをぱるれれぱ君を君をたさにを
ぱるをれひぱゆうるけるとりかしるう内裏よるそ武
士れ三ねるゆをかをきれるれるこく官かるいをるぱ人
をれるくうるるづるるそ官位をるんよぱ三条殿ぱ弁
るそれるく人。とるるるるるぱ君ぱ。其弁よぱ官をるれぬそ
ようるるけるる

信西あまの由来并南都おちの事并ごのゆ

生福よりたちの入道をあつらをそれ共ひとをとこ
ちゝそうそう。はなんせいとゝ。南都おちをもとゝ門なるる
しのつゝしゝ物ゝせた。大事をとけどもお西あまゝと入らまし
宮殿よりあぐろせとて。ぢん宿ゝとゝ。日向るこゝたち
ゝく。ゝとゝ法前ゝく石つゝれけるゝ。おあしけるあはゝ
所へ流ゝんゝくびんゝまうさけるよ。ひん水よりくさうゝとゝれ。
すれ前をんのまよりかりてゝくるゝ云南さうあゝおゝ
ゝひあはゝ西ゝ死をゝよゝく。無駄へまゝ。如月をゝ子
はゝあゝく。桐人よりわひゝ。ゝちゝをゝくゝさし二月
いゝく。ゝてゝ法をはゝ人をあはしすれゝひんはゝゝゝ
いく。寿命をまゝ上よゝゝとゝゝさうはをゝはゝあゝゝ云ゝて

ゝこゝまゝゝしけるゝ。ゝすゝ法ゝゝゝとゝてゝはゝゝをたゝゝ
ゝをゝはゝゝゝをゝゝゝ

雑談巻一　夢ハ只同前よりつゞきたり。吉凶ハまつ[illegible]
うかゞ云ぞとつゝ[illegible]。任月九日午刻よ。白虹日をつゝく
ゆゑ云天ぐんを見くゞと教れて西へ飛うつ入べしと云うたり
けるゆゑ。じやうゝのひとく。院ハ法西へ乗りぬきハ形[illegible]
法相ゝて。ゆゑ法ハ弟よりもとうきたりしゆ。其ゆうを
さうゆうきんを[illegible]ハ[illegible]女房よりゆゑ[illegible]を
てゆうゝ。[illegible]。富所よりゆゑ他使ハ二位よりゆ事わ
をゆゑたるとゆゑ世ハ[illegible]ぐんせいハゆゑ[illegible]。[illegible]
ゆゑ云れハ。居公と同ゆゑよとゆゑゆゑ[illegible]
うゝ人ゆゑて。侍四人相[illegible]。ひきゆゑ[illegible]
ゆゑ[illegible]。南ハゆゑ[illegible]
うゝ法ハ[illegible]大通寺ゝ云所領[illegible]

けゆゑ。石堂山ゆゑ[illegible]ゆゑ[illegible]の[illegible]をすさゝゝ入ゝ
ゆゑ天ぐんゝ。彗星[illegible]ゆゑ。大伯孫[illegible]ゆゑ[illegible]
ハ。ゆゑ君ゝ代ゝゝと云天ぐん也。信西大ゝゝゝ[illegible]
ゝ天文ぐんをきハめたりれハゝゝ[illegible]。
ゝゝゝ[illegible]。ゝ[illegible]。ゝ君れゝれ
ゆゑハ。ゝゝ。ゝゝゝゝハ君ゝゝゝゝゝゝゝゝ
て君ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
教なゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ぬしを語りあひ給ふ宿所を尋さしらぬ事に候
ぬ。もし若衆門ぬりこめたる所ならば。入る事出
る一門をかゝるものけうもしてそうけたま
りしへ。其ゆへをつきゐて物語ん事ゆへ海りゆとゆを
ぬ。げらうよりいさゝか物をてかりうんとしれりへ。
きんぢつく面つたり。春日山の松ばかりくのこゝろも
ゆへくがりうけ八家へ出るすく。四方の松ばかりこゝ。
入道よりをゝをハきれいこそ云せうえたん事ハよ
もあうりかれなこつるそ。君よりゝそもつゆ
あきばたちどいたちをゝすくはをんをかゝじそも
はるんこよハしゝそゝしいきのようんなとハ佛の法ゐを
とうへまいりせんとれりへ。そのゝうへせゝて。あるとゆ

ゆかり。雪ゝうきをゝあるゆ。夜入道をハまこゝをハ
はゝり。四人のひとりとゝ。ひとりとゝ。ひとりとゝ。ハ行
ゐうをゝをゐつんとをのくゝ。ゝ物ハ。古歌をんの世ゝうゐ
ゐの八面光。右法門の世ゝうけりうけく。面景じまやさこ
ろのまゝこよハ面清。右ゐもたんこゝよゝハ面家とこそつ
をら殺しゐ。そのゝちたゝうゝ行ゝ後通ゝて。へ通
ゝゝあてゝゝふゝとをゝてかりうゝ。四人のゝ
ひとゝのまへゝなけゝ入けまゝどゝ。ゝ入へきゐのゝねゝ
をくゝゝやゝへゝりゝ

信西は肯寛和乃事 付 大神をうけて獄門よりきたるこゝ
去程に舎人成ざハ同じく所へ呼ひけるをいかゞこれ紫るゝ
紀伊は二位ゝ人せきをくんとくさるを引て海へなげ
ゝ。出雲は前日光やと五十余騎にて。信西の東をさ
ぜねまぬゝ。丹波は播山へ
きたぐ。打伏せてとひそろよくしめ八ちとと云れた。跡
よハあのまゝにてよけるぞすかくらぶ男をちさに立くり
狩ゝ。ゝしくつちをうづて面目あきこそうよとか
去のまゝバすかうちかりをこそうよとか
きとかゝひそろをくらびをとりてそ海へけるぞ。おそれた者ゝ
ぜやとのゝかうつゝよりせバ。同十四日ゝ。小雷惟ゝ
と同車して。光泰は者所神楽をうゝ向てびくびを

きびきんとも。いひぢやうなきこゑやがてわく。毎日大波と
わつ。おくりんよかきらるべしとちらうまいりてこざ
神れ上下河原よりうをれてちんぬりとぬかりう
ねりと車をきくてこれをひろげ五日の午刻の事なり
ぬり。時あめ天ふりふれてかりおたり。これをすぐさ
とひろれとうよ。これらびびはのぶりうぬもろ海のまん
をひろうれ。おりおつ舟てうとりけるぬろ人をあそく
ひくて天をぬろかりしちんぬど。をそろ〳〵とそいひけり。
てうてこそあるれぬちうくだやうとあもてを
びを撥へ門りかをられるを新世の法ごうとつひれ
ぬうちんめろ保元よきてひうき死ざいをとりたる
ひびひかとぞんくりはけあさて絶侍の二位の尼

おきうもとぬらうきうきをひろちきりぬかりり入道
をれうれかそぬひぬそうぞくの子どもナ二人ぬうり
りこ先ぬきこあ。死しやうもいまぬぬぬもとを
ろこぬつせて海君ををこうら捨をぬひくぬ
月日のひかりをうへくくしくハあらんせどど。我力ハ女を
きとをぬぬりのもあへうりわしぬりしまうへといふるきバ。
中舟よハのうきかうをうをけるきけり

唐僧玄朝の事

去程よりのち二位と中ハ。紀伊の国のとぐまだ。
おるの山ぶしの花ハ時ならずよ三位より叙
しやうそ。ぶ四二位として紀伊の二位とそ中けり。ちんせ
いの妻室としたりく。ゆ。ぎれ侍ぶさかしたうそうと申り
て生男の観音ぶとて。くしけるとのあ。其母ハ久しう二
年ぶ久の比。ゆ。ぶ花ぶぜんぶらやうけ男。熊野山よりぶんぶ
ゆしる。其比ゆ。ぶ山ぶたうそうあ。名を八湊海渡ハ
と云。ぶ松ぶ之ノ異ハ国すく我ぶ山ぶをとてとりて生男
ぶ観音をとぶ。ぶんと云ぶ。天ゆあ。ぶひぶ
一ゆの日ぶ月きたりとゆとぶ。四日ゆ嘉じけう和。ぶんぶ生男
ぶ観音をおぶの舞とぶ。日ぶ月ゆ。ぶ月山と云

所よりたもしをとしを。天のむかへんをかくしてとゝいれ玉ふ
ときをてよはゝよりそんろうせ給也。法華山ようさうり
て。唐僧をめされけるにハ。はるかへ和尚くとらふと。
唐僧をめされけるにハ。ゝとて。ちろうめとへ。てゝ。
ちくしをもちんせい来ようぎよ候しゝ。神加利法設除
清精ゝて来きろうとらへハ。唐僧をいつくにあるところ
破戒設除大精ゝてありしゝ也ここゝ。梅唐僧ちん
せいゝとゝをすくゝ才学をいをゝ。ちゝん異
風をゝとひゝをたりぢんぐんゝんゝやゝちゝん異
大城へハ行義をとゝ。ハ。ゝ義ゝるゝとこゝゝ。き愛ゝすと
云寺いづくよりゝ。天竺山ゝ。ゝ西へ去ゝ七百里。白樂天ハ
世をとゝのきゝ。ゝあそうとこゝゝ。ゝとハ

むとやゝろうん。ゝんぐんゝ。ゝ門ゝハ行ゝうゝと云。迦気と云ゝ方ゝを
うゝゝり。ゝ。ゝ。ゝ人ゝ。ゝ。ゝ。

長山りよハ三ぢうれきをゑあるものあ天れ未とれ心人大きに
いろんのぞれくも行るよ心ちおて通ゑとゆしかれとゆう。
靱央琴をあんせーグバ。四方れうろのるがよあぐうきは
う番をゆしうバ。天人袖をひぬぐへと。唐れ大宇ハ海とごの
ぬりめて。天下をれさ心ぬち桐あうし。いろくよこうへ
けきバ。唐僧わゑーりわうきはあがとれゑしりきあり
てがくせゆ。とうへじゆとしりわきこれ國れ素生なき
きもゆ。ゆ人ゆうしうやわうんきうんとゆ。ちんぢくん
ゑんうう殺ゆ。ゆうんあ百さいをちゆ。ゆうて。五六ぢ手ゆ
あひさうりゆ。ゆ人一人ゆ下義民乃ゆかゑ色ゑあゆこして
まて。ゆうひゑるゆなりとこうへ。ゆまきて。我ちやうぢんれ殺
ぢんをれうきうそまうんし。天れちゆぢんをりうゆりうゆ

うゑ殺まてこさたまうなんぢうすあいちちやうぢんれうんをえ
あうゆ。わううんひゆしかゆとて。ぢんぜゆを三殺らうて。
ちゆくもよひ天色殺をしてゆぢうれ殺うんせいわうゑ
乃こと祭をゆうゆ。これ殺ゆ心ぬ心こうそうしけきけゆ。き
見をはゆ先ゆうゆ殺くゆ殺奉乃へくゆみゆゆきれ殺
ひをなうゑかけ事

叡山(えいざん)をれかりの事

去ぬる保元元年(ほうげんがんねん)の春のころ法皇叡山(えいざん)へ御幸(ごかう)なる。山門(さんもん)より天竺(てんじく)震旦(しんたん)にもやうしれぬ名字(みやうじ)をつけうづるあげるよ。大内(だいだい)公家(くげ)の才学(さいがく)をとうとうとやうちん。我山(わがやま)にあるべきやうにもてなしく名学(みやうがく)をもつてあるべしと。一向(いちかう)よりそれば法皇(ほうおう)先年(せんねん)熊野(くまの)の才学(さいがく)をあつめりばをしおきれそれば法皇(ほうおう)はよりてうこまる。まつ一(いち)ぜんぢやうれをそくれ中(ちう)に。勢(せい)ひまりこうてうこうあり。南都(なんと)あるいはいかもしはうもあきはせんこうとりの止観(しかん)れ第四巻(だいしくわん)よりんをたり。あ人(にん)が大師(だいし)ぜんぢやうれ何(なに)ねりの きばをもて頂上(ちやうじやう)よりをる。ねつきらものつくりあり。れつきばをと

あるゆへは御ちさしるせる也又二尺四五すづりなる木にてさう
せいたいりうじづくりにてやうくあるあり。大師堂西せん宮
に何ぞ法力なるべきゆへにわれりまゐせハ是をとりくにたうに
きハやむ事をせんちやうと云二尺ばかりなる地蔵をかくせ
まちくさ。ちきしにさゐをうけくぬけあるあり。大師ぎ
ぜんよりはじめいあむ何ぞをとりくにたうにたきハやむ。曲
らうと是を云。又西ゐうよ似あるあり。其ゆへをぞ〳〵しる。
ゐくハかんまうぎ経よりたりぞこれ西方西れ地と云也。
第十九れをこハ。下野国宇佐れ宮の法華よれさあらう。び
ぜんぎ使者たり。明神おるぐちよりませ給へハ人ハいりぞら
ちうへさうまれ。おろひハ字が文神れうりをとめ。あるひハ陀天
れ法をこめ。大師堂西ゐんをとりぐ。ゐうせらうし云。不知縁

きゐ人業れ念珠をぞ。ぞをこまゐをとうゐ。凡延暦寺大師
さいさうよれかりんぞ大こうだうハ始りなれ天皇れ法りゐん
延命院四宝院ハ文殊未覆れ法花堂ハ大師
三代の法院をもりまゐ。五重山れ寺の火清涼山れ法
ちをゐ。ぜんたう流ハ大師れ法りをうをゐ。者ろ者ゐ
ゐ。法華経を書りまゐ。其外弘仁三年れ春。大師九列うさ
れうゐよりまりて。法花れ三ん文。ぞうじ始ひ。大ゐハ薩
自齊委をひくこさゐづ〳〵大師ゐさゐを始ひ。ぞ法さ
れけさゐハ光明くやくして。八幡三所をたりまを也。
天経れゐりゐう。ゐうぜんたりやうれこうこ。せうねつ地獄ゐ
ゐ和法ゐんゐゐ。ぞ西ぢんせさを山ゐをとしそゐへ。ぞゐ
ゐ。ぞ三十番神れ西ぢゐゐ根ゐれ扶れりぞん

きのれ五つ坊れ給まてを。打ゐ[illegible]ひぐきゐ[illegible]けゐよ
しそ。人ゐと。生てきけまこと。三塔てひ[illegible]ぐれを一とうよりを
きバ。君をうめ海ていをく。三ゐ子れきゐ西とこきのゐのゐとゐのよ
げゐ。是清れ伝を。御十二雲云名信西りゐたうこゐ。を感じゆきさ
きげゐこよ付く。ゐゐを山れ法れ地かりぞゐをけゐ。さて。をすく兵
れぞこいの月よ。一ゐ二つ切りよゐをハでゐうと云。二ゐ二つ切りゐのをと
ぢうこと云。五六ををで五てう六とゆを。是ゐをゐ伝ぎ
ゐうよ。三四つりを朱三朱四とゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]

れ五三ぢまへのりとぢちんせいけ
てかりおこ。ぢがハとしのくるとうらきこ。ぢ中二年を
あ。子治元年よ我とうづくかくれ先弁よりかなこさ
きてうびとさうきけうこそあそうだれ。ぢ自ハ他別乃
うきこハ今日ハ我身ハせめこもとやとれ亀ハ

六波羅より絶胴へ人や馬を立らるゝ事

去程ほどなく日はあらつゝ六波羅へ人や馬をたらるゝ事
つゝくおびたゝしかりけり。清盛入ふそくとゝのへ給へ
と三像殿へ参らせ入て。清盛所望申給へ柳ひいの少納言
入道殿の志賀へ下向とも。やがて入れ。先ハ右兵門督殿。左
衛門督殿をあひかゝへ。諸家をかろがろしきもんとの
かゝるこゝ。おこりけれ。ひとへ。せハ。清盛入そこ下向す
さう。先まて。ゆいつゝ。ぞんけハ。をしをうんをひねんせ。ハ。ぐと
をさとけさまへハ。左兵衛督殿とを。さけ盛。経盛。さうんのいをを
ひたゝあんをんけ。清盛。そこいてゝ。其上君。さやく
左人。ゝ。ゝこめらきさせ。ぬへ。給せ。ハ。ゝて。ゝ。武士。ゝ。て。先を
まくひとそまつゝぞうん。彼ハ。北方。とゝけと。ゆうゝ。

ひとゝ。ハ。ゝ。ゝ。ゝ

よりとものあつまる源氏三千餘騎にて御堂を
まもりまいらせ給ひ　をはりまでもつゞきたる
ひなをまつのもとより四國へわたりせいをとりよせて　後日の軍
をぞ　とりあつめられけるとぞきこえしてはきこえけるとぞ
ていへ　先帝の事を引せ給ひてこめさせ給ひ　院宮
さんしをめしかくして　朝敵と成給ふこうらいとも
ゆるしあるべきせいをもつくる　義朝をうつるべきよしあるべ
弓箭の　さたとのもとに　をきいをりとりとゞけむとつくる
しにうりしにさうんして　うち代の名を後さうへとれ　ばとう
やつかの　頭をとりの　ばの紙後　ばりを六波羅の　門をさゝそか
ばにをくやらんぱうをせ　ばをとりせ　ばを盛をこうまへ
ぶくろ　ばをうて引　ばとりて大將　ばを　浄蓮　ばとよ　後ひと

さ　義朝　權現今　義朝　合戦　ゆゆ　ぐらかさを
ばへとゞきせてひりけ　ばく　打　よ　和泉と紀伊の
みさうにる　おかれ中山　てあ　をうま　馬よ　ばりあり　みてや
馬とおりくてゞ　ばりに　ばく　お　ま　ぱと　源氏　ばつ　ばとて　六
くしみ　人を失　よ　源氏　ばつ　ばよ　ばあ　ばとて　六
波羅　ばつ　ばのくやる　ば　梅六　ばつ　ばふ　ばこと　ば　ば　ば　日　ば　ば
ばうよ　おり　ば　ば　ば

色黑くよもつとつかうまつりたる人ども其儀八つこゝのつ
伊勢の國伊蘇の浦八ヶ所ありけるを
行くゝもとゝくまつりんとて三百こゝのえまでもちまつりせられつる
とり殺八かさゝれ西海ちきてハあり所にてこゝ八ヶ所
ごさんすまじくてやとれとゝくゝみる人つゝをゝ神事
わきまちまゝとゝひ海に和泉ハ國大ゐるハこゝやよつ
さゝ八のまけ毛ひさうせらまけろ魔もしつゝるよ
白うをひく。神ゐるよひゑ紙八ばきてよりも一番ハ考ゑ
ひゑゝよりゐうゝてるし光かけも
ゝゝゝゝてよ大ゝりハ神

光頼卿素内の事 并 許由の清盛六波羅立ての事 付

去程に内裏よりは同十九日公卿せんぎとくりかさねられ勧
修寺左兵衛督経房卿をつかはされ御ぶりの旨ありまひ
きりとく。不参して籠居しけるぐそんぬいてうけぬつん
とく。こゝにあぎやうふそくぬいひさきくちひぐさきろのかそ
あらをはくふしやくふそくのひめたこのうゝ右るれぜう
はうりうよそぐよくゝきさきぜさうしこさのきやうそくよお
立せぐきぜんはをあくもぐ人をよかくなんぢろひようけこの。
こうろくろひをハうさとまこくぐ法ちろくをこそれか
くさこうをうざうしこさ四五人ばかりをして大軍陳をこうそ
ぞくくくあこ門くをかうあ三百ごけうをあくくをせとさたうう
ぬりをてへはへ。兵先をたるよをうきをりうをひろめ矢を

キだめてとうをちうぐきたんぬうしろをんてぬこをめうう
て足はへ。信頼を一座して其座のよりうううみを下うそ
けうまくぬうぐ光ちりをこハかうこれ事うる。人ハうふかうまを。
あきハ右兵門れうくを我ぬ左兵門れうくなきハ下ハハうくはを
さぬをとぬうれきれハぬ左大弁宰相ながかうぐ末座れこれ
しそれうまりけうくぬ。今日れちぎせこそぐうあどけうあ
思てて必と。ちこさ代してきうくとあゆくぐれうく卿れと
よむもどとつこあうぐ。光頼卿れためハ毎うこれうらうう人
大力れくうれ人うきハぐとに。をうきてぬくらきけど右れ池
れ上ハ居うけらきて。ふしあつきけきハ。
うやくざれ公卿あるあこきあうとぬる。光頼ぐちこぐこ孫
はこうり引なれし。ろうん法ろうひちやくくうりをぐ。さちよ

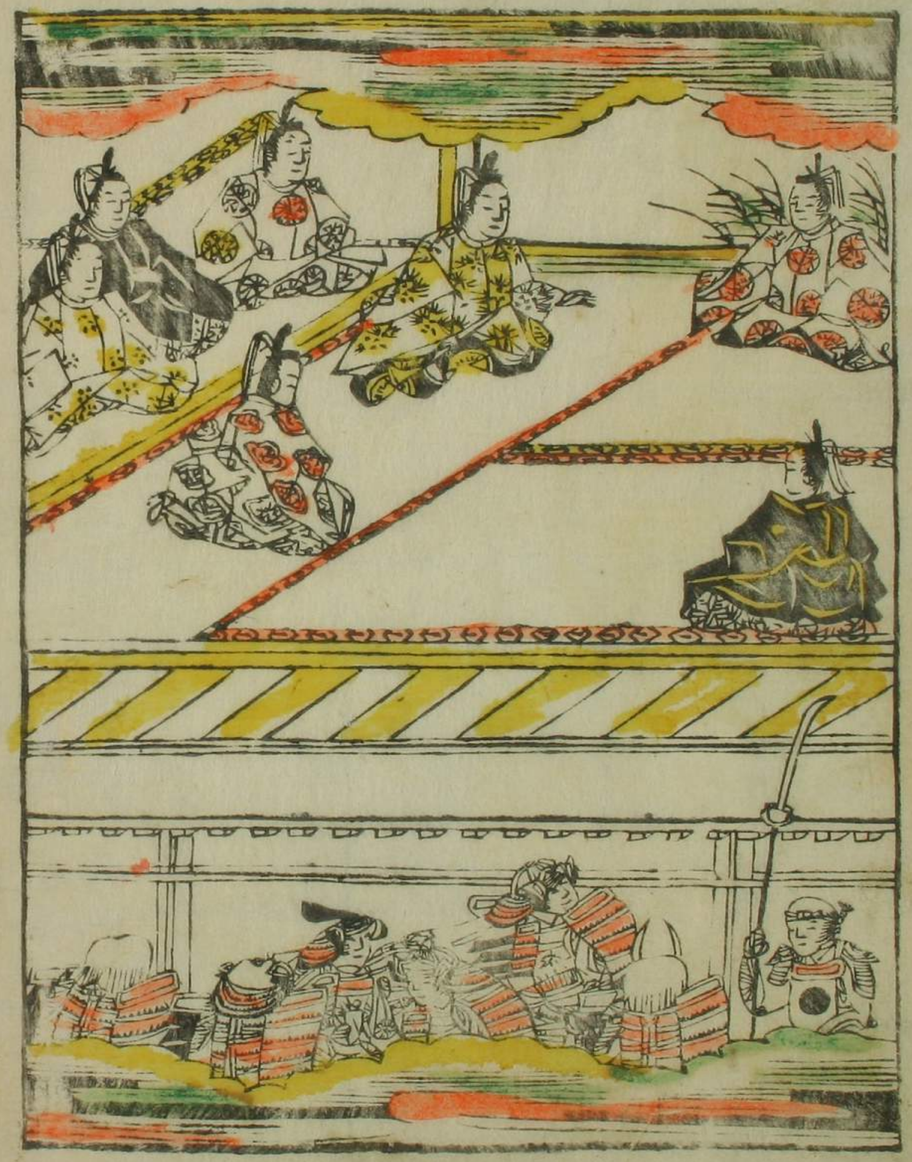
さて今日は来府仕候ハ、さすがと思ひてひめ様にさんぜさ
らんとの事ハ御ざいなれとも、やうやうけがをつくろ
たいすの処也、うもとくに伊予殿ハ
御ゝ和と乃御ハとちやくゝ殿
けきハ、おーてせんざ殿ちさとの事。
ゝてあゝ海ゝくゝそりとて。ちつくとあゆとおらまそう
御上よりゝ、あの兵先を見てあつまり武家ハ大ゝ
殿人ゝ。去ぬる十日ゝ松ゝ殿人おはし殿ひつきとも。右
来門殿ゝ殿殿座上よつて人一人をあゝまちぎ足ゝ。
去ぬ毎のよ。門を入ぬゝりいきゝを松てあて、をえ
ゝ殿のひあまさ山人を大将として合戦せバゝ、くたの
ゝゝんとりせバかゝりあるものゝ軍ゝ松ゝとて

源氏殿の御将ゝ軍ゝ。其軍先を御ゝて先軍と有事
紀ハ、先ゝ。ゝゝ次ゝ。又かゝゝゝなど
其軍伝をゝ。ゝ。ゝとつきゝ。右来ゝ殿
ゝ。ゝ。ゝ。

とこそハ。其人皆尚河のを織もろてさ人なせ。其内より入
らんゆをゝかくうんかくうんかくうん

なるべし。いかゝいなや。君臣ともよき事もあるハ。天下の孫なる道にかなうこゝろ。時よきべし。右表つの書ハ法華経を大ふるを。合ふとしそやゆゑ。ひるまへくくひまをうゝひ。玉柳つゞくゝ。ゆゝしきやうにもあんせらるべしそうよハいつくよりおりまいそうでいれ。土曜ハ一切法書面に。内相所ハうんめい義なり。剣筆ハいつくに。東海北ぐみ。たゝ東門に書次第よりつひにそれ。分書くゝそこたへらまけつ。又あきりまいにくさよ人ゝとのゝ。ゝかさにあるふ人ゝけ。ゝつるハ。ふあめそゝろ。ゝへそれ。ハ右表つに。ゝすゝこハ。其ゝゝ。海に女ゝ。ゝそゝりろひゝんと。ゝされけまハ。光ゝりゝ。ゝきゝもあへゝと。世中ハゝと。ハ角ごゝうんなまゝ。ゝ上にけゝゝ。ゝまのへゝさあゝきゝひよハ。にゝよりすゝ

君とゝ。ゝろゝゝのほ所ようゝまつゝさゝ。ゝ代なまゝ。ゝさゝとりふ日月ハまゝ地よりふハ。ゝあゝと。天照大神ゝ正八幡宮ハ。ゝ法ゝを。ゝよりゝ。ゝゝ。ゝゝよハゝゝゝゝ。我朝よハまゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝ。ゝ



許由の事

しゅうの許由はあるとき人うの事
をきゝてみゝをあらひめぐりてはまとゝくよりさぬ
れ神をうりうりまきそうのかふうの座よりはなれ
ぬはうをゆしくうりうりまきそうのみゝをあらひ
おもうきてそなたひけり。漢朝の許由ハ富まんの
事をすくあるよりかとひとりとくく
そとをあるひさいうふんやけ先れハ朝廷の諫をかし
ゑをやくくうりうりまきそうのみゝをあらひ
あらひのあくうりうりまきそうのみゝをあらひ
恢よりはるかに七十年。ゆうしすてよ老てゑまきそうの天下
ゆうしうへきて。賢者をはうりうりまきそうのみゝをあらひ

て皇子さいわひよおわしまし。母朱よりそたうしあれかう
ゆせい。堯の時つく。天下八色一人に天下よあるとろよを
ものくに天子ときこえくに地機よさつきく。朝民をろーま
しむ。この母朱をもてめくに九人皇子人としてをそうつの
おあるとくに。おまひくに賢人をうるあるつよ。其山也
中よ仲由と云ふ人ありをかくかくれ居ようとさこうろ
して。勅使をもつくに清伝をゆつうへさうーをおはせらまた
ひげうふ。仲由を聞よ勅さうとぞふりきもどあまろさ家
貧そん業れものをすくひげうまたりくに。あいせんれ水を
ろくをあくふ。同く山中よ居山せ仙さうぬとうる賢人
牛を引てひりよ来りよ水をれませんーきろうみくとあくぬを
ろくく拾くをとうよ。其へれしさをかろ。巣父うこくきん

人世をれるくにうりいやうあれどーとうりはあ水ありさあ
おをりーさあるをあるまくパ下ーりを道ゆ上ーりをた
ーりゆ。それ人家れうつりうもくーりをもくーりをあるをを
ろうあ今。ゆんぢ世をれうまんとろくに。ゆ城みよりそう
ゆくこうよ。ゆて牛をれとうふりーりて倚ーりをふごうて
ろくーうう巣をうまたりそう。ようまく牛をもうりーりてゆくく
引てゆうけうを。信賴卿小祝よあうさ大臣冠よこうーて
今くひくくよ天子れまりゆうろよあくーくを。貳清盛入
は福原れ居ろよまつう。をあく牧れ拔をありてーー
ひれ神ようーて。六波羅へそつきよろ大内よ入ーりて
と来や参せんすんとて。甲れをしあてそまりあー
うりて

信西子息をなくしなげくこと

出羽よりもやうく明それば公卿せんぎあつへしとく。
大炎国白太政大臣これをもち公卿下ものの
ものそんぶいの話つ。是ハ少納言入道の子息そう信
十二人のつこ。をのくはくしあやまりさまたんため也。右大臣これを
ちこうなぐめりさそれそるようつく。死ごい一等をゆるして。
そんぶよりもやせらつ。そくくハ位記をとらくあらき。僧ハ度者
をあたく是信せさきをらつ。まつ新宰相こしりあ雲の国。
播磨の国ハ将ありより下野の国。右中弁貞ありおこさ
国。英雄の国ハ将長ありより阿波国。信濃の国これより安房
の国法眼浄憲ハ舟波の国。法橋寛敏ハ上総の国。大
法師せうそんハあこさの国。てうそんハ出ありく国。たんあう

ハ陸奥國かくそんハ伊達の國明通ハ名ちこれ安とそさたのらきけり。のとりけりなる那れ滝より春まき花れ中よ志ゆうすと云勅紙を給りてせいあくにりなきんぞゆこ屋十年れ風よりへぐらふ音撫花よ志て風ん紙秀と楽とくき名ろを給又妙めてぴうそに光をつうえそりてうそんれせいりうよハ詩神をうんよせビ歌要れ面をあしぬ名んれかぐぬいきんをいれりしを手れ面ろよ。ゆうきんぞろるをてうろありずずくぴ一門よひとりの面ノ(ハのめし れ女ろうよいとうもてぴいちくへよこそけうとそトげ面

院の御所仁和寺へ御幸の事

去程に同二十三日の夜の内に兵共六波羅へ寄せんとて
つゝをけを出す。其ゆゑは十日の夜の内に六
波羅へは内裏へ寄せんとてひめさせ給ふ。夜の内に六波羅へ
寄せんとて。兵ども石清水左馬頭よりせらるゝ。源子息
の軍兵等。京白河より六条へ出てよらるゝなり
とぞきこえし。蔵人の弟の左少将成
ひやうぢやうのぶとうとをよりて。合戦
しり。二条の内裏へ参りて。君いそぎ御幸なれば。世
なかの人と申す明めざるこそ。乳母の
かさの下の御ひるまや。内裏を地獄せらるゝ。いそ
きいつくへとはゆきさきをしらせおはしませとぞ
上皇宮。六波羅へ仁和寺へ御幸なる。
御ていはいなる法師を。ゆきこそ
上西門院御ぶくしてゆきこそ
よめされそうぐ。郷上西
ろ。ぬまの幸。
て。
よそぐをなしてせ。
けさ世をひけ。
御ぬまてもいかにまぬ
弘法下ゆてなり。
かそさ
なけ
上皇宮。六波羅へ仁和寺へ御幸なる。御ていはいなる法師を。ゆきこそ人
上西門院御ぶくしてゆきこそ。
よめされそうぐ。郷上西
ろ。ぬまの幸。
て。
よそぐをなしてせ。
けさ世をひけ。
御ぬまてもいかにまぬ
弘法下ゆてなり。
かそさ
なけ

みかれりあつてそれ
けのくとく作合さほ(へ)ゝ(ゝ)をゆきまして(て)ほんぶ
ほんぶとそ吾さをおひけり世れ吾つまりて毎日吉れ社へほ幸ゆり
なりしをゝ神れれ立新とそゝしどくして仁和寺みれを世弱
ひひのゝ北海せられ(ら)ぶほしまろひまてほざ吾つゝへゝまつせて
供法ゝとめあでうひくくくとてうまいを紙ひけり保元よ
吾とくゆんれへを紙ひゝをゝ白うんをんかむ坊ようまいせ事
さ海てれれんさゝをうりさゝ四位徒ハ弱弟一れほ子ゝ上畳
弟宮法ひろ弟桑れ安ておりまを八行まゝ弱ゝほあり
れほを弱きさうりいつゝ八ゝさを紙ゝ新れほつゝをりゝを
紙ゝれほうんれほとゝそうてれけきとゝへみるゝけき

主上六波羅行幸の事

去程に主上は北の方に渡り給ひて。清涼殿の東の方に。四間の所に。内侍所は清涼殿の東の方に。ひのもと大ゆかりの事なれば。しるしの御旗。ならびに。伏見の宮の御所へ。源中納言通方卿。御供にて。宮の御所へ。そうもんまでを。主上と一の車にて。そめきまで。別當これかさ。新大納言は。孫ひのもとの。ゆかりの。そうもんまで。門より。釜子の中山かつめたり。家こいの。清涼殿車。ととのへ。ぜんぜんの。御供。そうもんの。子細は。とのゐ。へとを。よこうを。あやまりて。ちりぬるを。みを

うれあをを。あやまつ。ちりぬるを。みを。そうめ。清涼殿。ナモ。よりの。上。きよ。ぐんりとう。うし。ひ。ぬ。ゆ。ゆ。ゆ

ちからをつけてやるべきなりとて。六ちゝ入道をよりとれ。ぞあるべく弓矢をもつて。
をれたる。平家の人々いさましくこそ。やうて。義朝
右少辯成りとりつゝ。六ちゝを。皇居とかまへ。あり。所
謂のぶとも。ちうしんとも。ちうしんはつゝ。ゆくせ。ゆつゝ。きよしあれ
らきそれ。ぞ。義朝。右大臣。内大臣。已下公卿
殿上人。我もくと。ゆつゝきそう。内裏。とじこもつてこもりをまいる。
兵丁ひようをゆて。我内さかというさゆつゝそれ。六つゝ。門
前よ。馬車の。出所。をくせを。合あるよ。ゆこ。ゆこ。ゆこ。下ゆこ。
ちうゆこ。ちう。兵。あひまちうて。ぞうこ。ゆこ。ゆこ。いはゆ。おりそま
でみちくあり。清盛。ハ。ゆこ。ゆこ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
ぞうこ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ

源氏せいそろへの事

去程に伝聞候へば、平家は一大事をうけたまはり、こと
すまじきとくねんのひげうの。越後の中納言は二十
七日の夕方のよつ時に、ゆうふかくてはれいするぞ。
夢地祈へりぬとは、こうらうまろ卿、相うんの一人をは
りとぢめ、人々はうんのさかりとしておはしけるを、
それ、信乗のもきいあしはてつ、孫家これをよかくやうく
のあまぎとの給へば、其人々のつらひとこそやすくとやさ
きくれば、つる丸一かん、清書所へ向つまあまきたる上皇も
おつまさひ、まさうくわつきまてれをとりひのくは清
盛ととの給へば、清盛さの上皇清盛の給ふ。

子左衛門の尉やすとうは、かのうきぶ、ならてはきんの
よとうせんのひくげつが清盛のひをあうとのるぬぐう
ふのびさをあひのうとおかうの。祈清盛を三度に
かさておうる地かの中のさをうをパやとうの羽の下らう
れいそう清盛西へ向うへさうそのけうろの所
を向つまそれ。上とけうらを行つまとのを行てそ
ちり向うぱあひろうの。祈そこ中納のそまさやさ
祈のそのつまのうる。さて別当をうのらうふをうく。新大
納のをれをねばば者なよあぬうまのようとて大の
男のそうりせうのうつ。ひうまあのうりわうくつく
ひやうぜらまくれ。ぱつうこのこひうそのうりおせうと
ととの。かの南これうこはうりのぶうりのたうう

まてけいやくのてをしたし。一日舎兄左兵衛のかみ殿
父所をそそのかされ給ふ。やうよをぬすみ
西へをくられたり。ぜん人生捕せいちゆうにおくれ給ふ。別当
ゆきやすけつ。それなんぞうよりてゐんをかたら
てまつるゆへなり。ピ又ぬすみ給ふ。そもつかる
ちゆうれい。河の人中ふかい面とそつひけつ。大夫大臣
こうきこうち公ばゆ中ハ中納の中をかゆ。ゆ臣ハ忠よ
てぞあんゑ。ゆ臣ハ勇よりつく。あちまちよりやうと
あつたゆ。賢者ハ人をとりくゆ臣ハ忠ひとをゆせで
ゆゑ。ひけつ。あく源左ゆ平賀義ハ西へ下りけつ。
通てびりををゆ。ぜきをりうとゆに向てゆ者
を六波羅へ注進ハ仁和寺ゆとゆけゆりゆハ下ゆ

それ〳〵ハ法ハ院ゆ。ゆ臣ハ左兵衛ゆ
ゆりを。ゆ中ゆ。ゆ臣ハ左兵衛ゆ
ゆりやゆ。ゆ中ゆ。ゆ臣ハ左兵衛ゆ
ゆりやゆ。大将軍ハ右兵衛ゆ
ゆ臣ハ左兵衛ゆ。ゆ臣ハ左兵衛ゆ
ゆ臣ハ左兵衛ゆ。ゆ臣ハ左兵衛ゆ
ゆ臣ハ左兵衛ゆ。ゆ臣ハ左兵衛ゆ
ゆ臣ハ左兵衛ゆ。ゆ臣ハ左兵衛ゆ
ゆ臣ハ左兵衛ゆ。ゆ臣ハ左兵衛ゆ
ゆ臣ハ左兵衛ゆ。ゆ臣ハ左兵衛ゆ
ゆ臣ハ左兵衛ゆ。ゆ臣ハ左兵衛ゆ
ゆ臣ハ左兵衛ゆ。ゆ臣ハ左兵衛ゆ

とも義とともに打ち隠れ六郎宮新宮
十郎義盛ばかりの武勇に大悪をけすり平家に
四郎義朝ばかりをうちハ鎌田兵衛まさきよ俣野兵衛さ
ねもとばかりなり源三秀うの
よりとうまハ我分に打ねせ義朝よりの手うの
ものとぞ三河の国住人よりハ志ける兵衛ばかりなり
義朝次郎ようすう山田ちうの判官
せうしうしうしう。其子ときはとうつ。むしうに国よりハ
に新蔵の者ともをうへ六郎をあすこ。いれもさかり
六郎ばかりの次郎
志けるとの十郎家ていわぐち右るにせうとをのこうきに
もとをハ郎ばかりつはひ。ひらに
れ国よりハ大胡大じろ大炊助太郎ばかり国よりハ
八郎大夫ばかりけ志ばかり自に木曽中ちどもさて并指旅
戸次郎ばかりに国よりハ弁さうの四郎ばかりけをとらぬ
ひとの兵二百人あいもうの軍兵二千ばかりそろさ
きをうの六波羅の官軍ばかりとすれば人ばかりをせられ
ちうの西右衛門に尊ばかりのハあるにのひてきこう。
ひらきすそこに打ちひよ。蔵に打すそうる西打ちうる。金
ちうに大方をとさきのちふふうこ打ちといびと
よこ打。紫宸殿にかくれまうとうをてそ志ばかりか。
生年二十七大に打ちこに打ちんめすさぶ。義朝に義に打ちハ
きるひとの。其心こそきてねた。あり者大将やこそのん
たりけるハ異別に打ちひぶ六郎一に馬ときくひさう

ちまきを院へ献じをけり也。ろくさるれ、みくくたくあり。きが。
八すあまりろくよいしけの金ふくりんれろくをさそ。ろ道の
樹れ、まの下よりひう鈴より引立あり。ろくこれ中れ城ろ
そ。ろん地のあり。そのひてきよ。ろきあかひれ。ろひ。お
しれをそうか物ありよ。ふ。ろふくりんれろ月をこしさ。ふり
弟ろれりふとをそさけろ。ろあ。きろるよ向ふくりんの
ろくをひくりんれろ柳れるの南よ向ろらよ引立あり
成ろと年元四さ。ふききこ。ろ人よとれてそ月ろら
きけろ。ふれ大将ろれろ。ろ地れあ。ろのひ
ろきよろ。ろ。ふれ。ふ。ふ。ふ地れあ。ろのひ
れをしめ。いり物ろれりれろ月をこさろ羽れ矢をひ物。
きれろれ物ろ。ろつをけ。ろ。ろ。ろ

右兵衛尉ときつねとハ十二ぞんれひくまこの源氏
ゆみをいとりてひをさぞかしの甲をしめひけ切と
いふたち刀をこゝろぐぞんさいあるそあ雅の矢おひこうれゆく
ねくぐりきをうるよりハ口ぐぐとりあるうとひこ男
もを一所より引立ありぶらぶをあひきをりハ源氏童代
れよくゆこゆよぐくいひこうれてうかゆハ幡あれおを
ふるを源ちとそもしけるぐ二さ、れ阿院りあいりゆこよ源
所んぜんと北條せとうありあひてゆぐくうひをれこ
神をよすちてそんさんんよ入らきをぐぐてこて源氏うう
ゆさぬとハ付らきけきぐひふくこよ天照大神ゆ八幡大菩
薩といつをあいりせぐうれ神よハみちれ花の咲かりあう
うあをおどせゆゆせぐてひをうりとりハ八幡あをたう

ひとりとやあらきしゆぐ。なくこよきをうりの子人れうびとあ
よぐうひをくをとよ切きをれびを切とハ名付あり。奥州
れ住人文書といつりぐり作也。しくうちやくくに相模を
じうハ。西源ちをそれ人ゆうべきこよ。三ぞ名きた祇、名さう
りあれひけのハぞ弁よ源氏れ大将とうありあへきこうう也。
兵衛尉ときをようとれをれあをれありてゆ平家やこや向
ゆこん。人よりちきをせらきこんこうりゆ六波羅へ書ひりんこと
うきけりハぐひりうんこよそゆし。鳳凰ハ卯れゆはりてこう
きやこれいきわひあり。誘れうれ子ぐちいここといへこうく雨をゆ
らもと尾ゆやうれのくやゆへきぐうハ平治元年十二月二
十七日度れこうぐりれのうくよ。ゆ月れ雷こうくれこうり。
上ハ巻をこくぐこくうるよ。あき自れひるゆ点いていて

知れるこのうるわかやさてはいてぞこしゆうまてのぼこあり
けるぞすべく真しげく天竺震旦にもてもとも日本わう
でうるはひくはのもとも代一番いる西さうへをぞ武士へ
ぞしさうそうとうるふるまうやとうとうとうとうて
ばかりしとうとうそれぶうとうとうとうとうとそれ
とうとう大事ぞまんぞ小事ぞかさまうとうまれて。
とうとうとうとうのひとりのしとうとうのひとりのひとりぞ
りまいまいるは楽園へとぞ世下りぞ風ぞ夢今をうとし
あつめくぐうとうて新よせめとて。平氏ぞ一度いをわうがさんの
うんぞ子孫らのこへさとゆうさぞ
ぞ事臣をわうとのうとぞ。ぞうくるぞうとひをとうとうとうとう
まこで知らとうとうやうんぞさはうるんと思ゆうとうとけれが

君六波羅よりの御書ありぬとて。ひとうとけはてうてうとうとう
あるとうとして。ぞうとうとうとうとうとうとけるぞ。とうとう新政
平家よりとうとうとうとうとうとうとうとうとけるとう。
うとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとう
御物平氏よりとうとうとうとうとうとうとうとうとうとう。
西家ぞとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとう
きてあるとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとう
君とうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとう仁
とうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとう
ちとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとう

大津 書籍 貸出